

♡サンプル①♡

「すんまへん、お待たせしました」

おじさんの代わりに奥から出てきたのは——気だるげな表情を浮かべた、目を疑うほど眉目秀麗な男性だった。まるで映画俳優のような隙のない佇まいに、それまで見ていた店内の光景が、急に安っぽいセットのように思えてくる。彼の顔に落ちる深い影が、その仄暗い美しさを一層際立たせていて、僕は反射的に息を呑んだ。

彼は駄菓子屋の店内という場所には不釣り合いな、漆黒の上等なスーツを完璧に着こなしている。撫でつけたオールバックから、数束だけ額にかかる溢れ毛が、僕の視線に合わせるように僅かに揺れた。

「えっらい若い担当さんですなあ。君いくつ？」

この人がさっきの強面おじさんのお兄さん？ とてもそうは見えない。似ても似つかない男性美漂う顔が、僕を不躰なほどじろじろ眺めまわしている。

「ぼ、僕は今年で二十三歳で……^{きのしろちさと}城代知慧と申します。新しくこちらの担当になりました」

差し出した名刺と手土産を受け取った謎のお兄さん

は、さらに近くで僕の顔を観察している。切れ長の涼しげな目元の奥に、ありありと好奇の色が見て取れた。

「城代クンちゅうんか。ご挨拶遅れましたけど、僕は楠戸くすどいいますねん。シケた駄菓子屋やから名刺もなくてごめんやで。ここの店主やらしてもろてます、あんじょうよろしゅう」

楠戸さんは口の端をちょっと持ち上げただけの薄い笑顔を増かべた。笑ってくれたのが嬉しくて、身体を直角に曲げて深くお辞儀をする。

「よろしく願いいたします！」

「若い子は元気があってかいらしいなあ。どや、うちで茶でも飲んでいかへん？」

「大変ありがたいお誘いなのですが、僕そろそろ会社に戻らないといけなくて……。次回、是非お願いいたします！」

楠戸さんが大きく目を見開いた。そんなびっくりすること、あったのかな？ 百瀬さんからは、お客様から食事やお茶に誘われても、社交辞令だから本気にするなと言われてきた。きっと楠戸さんも僕を気遣ってそう言ってくれただけなんだろう。

「そうだったか。じゃあまた会えるん楽しみにしときまっ

さ」

「はい、僕もです！　引き続きよろしく願いいたします」

頭を再度深く下げて、「失礼します」とその場を後にした。引き戸の建付けが悪くて、うまく扉が閉まらない。自分の手が震えていたからうまく閉められなかったことに、後から気が付いた。

（あー、緊張した……。でも、楠戸さんはあのおじさんより怖くなさそうで良かった。あんなカッコいいのに、駄菓子屋の店長なんてもったいないなあ）

一時はどうなることかと思ったけれど、案外皆普通の人だった。やっぱり先輩がきちんとリストのお客様を大事にしてきたから、僕にもこうして優しくしてくれるんだ。僕がその流れを断ち切らないようにしないと。

手元の腕時計を見ると、十二時をまわっていた。急いで戻って報告しなきゃ。ネクタイを緩めて、駅までの道のりを急いだ。

♡サンプル②♡

楠戸さんは僕の耳たぶを優しく噛みちぎるように吸い上げ、低く甘い声で囁いた。

「ほんなら身体でじっくり教えてるわ。声の出し方から、気持ち良うなる場所まで……全部、ぜえ～んぶ…な」

楠戸さんはすぐに僕の下着を脱がせ、両脚を掴んでぐっと割り開いた。

「ひっ!？」

白い双丘の奥に、濡れた指がぐちゅりと入っていく。彼に秘部を見られる羞恥を感じる暇もなく、全身が強烈な異物感に支配される。

「あ、う、うう～～……っ、楠戸さ、ん、くるしい……」
「苦しい？ でも、すぐに気持ち良うなるから」

ベッドの上に零れる唾液も熱い吐息もそのままに、とにかく身体の力を抜こうと必死にもがいた。楠戸さんは指を中で折り曲げたりして、未踏の菊蕾の感触を味わっている。

「あ、あ、くすどさん……！ やだっ、そんなところ、だ

めです……っ！ やっぱり、ちょっと待っ……」
「城代クン」

指の動きがびたりと止まり、彼の声のトーンが一段下がった。楠戸さんはいつも一声で場の雰囲気を変えてしまう。

「ちょおっとお喋りが過ぎるんちゃうん。ココ、僕がブチ抜いたってもええねんで……君ならどうしたらいいか、分かるやろ？」

いきなり指の本数が増やされ、喉までつまったような苦しさに、声も出ない。逃げ場のない恐怖しさに涙を浮かべながら、僕はただ彼に従うしかなかった。

「良い子やね〜ほんまに可愛いワンちゃんやなア♡」

恐怖で震える身体を無理やり押さえつけるように、楠戸さんが僕の腰を強く掴む。シーツを噛んで必死に声を抑えているうちに、容赦なく体内を掻き回され、熱さで頭が麻痺してきた。

「んぐッ、んう！ はあっ、はあっ、ああ……っ！」
「具合好さそうやな、ほな入れまっか」

ようやく指が抜かれたものの、異物で押し広げられた

後孔は熱く痺れ、じんじんと鈍い痛みを放っている。

（こ、このまま楠戸さんと——）

取引先と一線を越えてしまう恐怖に、身体の震えが止まらない。

静かな部屋に、ベルトのカチャカチャという金属の音が響く。楠戸さんのソレは、既に硬くなって上を向いていた。触れずとも血管がズキンズキンと脈打ち、膨張した肉茎部が揺れる。赤黒い凶器に怯えて息を呑むと、楠戸さんが優しく額に口づけを落とす。

「大丈夫やで……可愛い可愛い城代クン」

甘い声音に身を委ねかけた瞬間、容赦のない凶器がミチミチと狭い肉腔を割って侵入してきた。

みぢい……ッ！ めり、めりめりめりめり……ぐぢゅッ！！

「おッ!? あ、あああ——……ッ!!」

内側から引き裂かれるような熱い痛み、悲鳴が上がる。逃げようと腰を浮かせると、楠戸さんの重い掌が容赦なく僕をシートに押し付け、深く根元まで肉楔を打ち

込んできた。

「なあ～逃げんといて。僕の形、はよ覚えてもらわなあかんねんから」

「ひっ、うう、無理っ、無理です！ 動かさないで……っ！」

はあはあと肩で息をしながら、猛る彼を必死に受け入れる。楠戸さんの顔には常に薄っすら笑顔が張り付いて、ここでも表情は一切乱れていなかった。

♡サンプル③♡

繋がったまま楠戸さんが僕の唇に噛みついてくる。口が徐々に下がって行って、首筋をべろりと舐め上げた。

「自分、肌白うてよう首輪映えるよなあ。消えてしもたん惜しいわ……付け直したりま」

ちくりと鋭い痛みが走ったかと思うと、肌を吸う音が続き、赤黒い痣が付けられた。我慢の限界だった僕は、それだけで前が反応するほど敏感になっている。

「えらい泣きそうな顔してるやないの。苦しい？ 抜いてあげよか？」

口を離した楠戸さんが、ニタリと愉しそうに口の端を吊り上げた。

「や、やだっ！　お願い、抜かないで……！」

僕は今にも零れそうなほど瞳に涙を溜めて、みっともなく彼に縋る。

「イかせてください……もう、楠戸さんのじゃないとダメなんです……っ！　前みたいに、っ、ぐちゃぐちゃにしていいいから……」

「へえ、いじらしいこと言うてくれるやんか。でもなア、ヤクザに『ぐちゃぐちゃにしてい』なんて言わん方がええで」

楠戸さんは僕に付けたキスマークをそっとなぞって、そのまま首に手をかけた。少しずつ力が込められ、呼吸が苦しくなっていく。

「ほんまにぐちゃぐちゃにしてほしいなら、シャブ打ったげよか？ 首絞めながらヅケマンすると、締めりがエグイ良うなんねん。今度シよな♡」

「あ……」

ひゅうひゅうと間の抜けた呼吸音が漏れるたび、楠戸さんの力が強まっていく。薄らいでいく視界に映る彼の顔は、嗜虐の愉しみ一色に塗り潰されていた。

「ハハ、僕の手ェで知慧クンに首輪つけてるみたいやな。よう似合うね〜♡」

僕は酸素を取り込むことに必死で、自分の芯が上を向き、涎をだらだらと垂らしていることに気が付かない。意識がブラックアウトする寸前で、ようやく手が離れた。急に呼吸が楽になり、盛大にむせてしまう。

「げほっ、うえっ、げほっ！」

「ほんでイかしてほしいんやったっけ？ そんな可愛い
こと言われたらしゃあないなあ……ご褒美あげまほか」

呼吸を整えている間に脚をグッと持ち上げられ、楠戸
さんが角度を変えて最奥を抉った。

ゴリュッヅッヅッ!!♡♡

「あぁあー————っ!!♡♡♡」

(気持ちいいッ♡♡ 奥しゅごいっ、楠戸さんのじゃな
いともうダメっ♡♡)

身体中がかつと燃えて、絶頂の波に吞まれる感覚に襲
われた。楠戸さんは顔色一つ変えず、薄い笑顔を張り付
けたまま腰を振り続けている。

ゴヂュッ!!♡♡ゴヂュッ!!♡♡ゴヂュッ!!♡♡ゴヂュ
ッ!!♡♡

「知慧クンのケツマンコ、締め付けエグいなあ。そんな
必死に締め付けんでも、チンポ逃げていかへんで」

「あっ、ア、ああん!!♡ おっ♡♡ 奥にくださいっ、
イきたいいいッ♡♡」

強すぎる性悦に身悶えする僕に、楠戸さんは容赦なく

肉楔を何度も打ち込んでくる。高いカリ首で髪をガリガリと抉られ、奥を亀頭で殴打されてしまえば、陥落はもう秒読みだ。身体を弓なりに反らせて彼の名前を叫んだ瞬間、目の前が白く弾けた。